



“多彩なレシビ”

ふるさと探訪

折々の記

根開き・菜茹^{じょ}・石鹼玉^{しゃほん}

「人と自然がおりなす輝きの大地ひがしかわ」で、共同・共有・共生の「ふるさと探訪」を続けたい。折々の記として……

根開き……雪に覆われた庭のつじや松の根元が、すり鉢状にくぼんで、春の土がぼつかりと丸くひろがる。これを「根開き」といい、やがて福寿草がどんと顔を出す。日増しに。

五月ともなれば、根開きの点が線となり、雪が解けて一面が「山笑う」ころとなる。「春陽常に根開きに和す」ともいうから、自然の力は偉大である。

去年「冬構いをした時に置き忘れた鎌が、石楠花の根開きで見つかった。」という親友の話。

そういえば、愛用の肥後守（鉄製で折り込み式のナイフ）を見つけたのも、庭先のスモモの木の根開きだった。少年のころ。

菜茹……テレビの料理番組で登場した菜茹とは「山菜の茹で物」のこと、旬の味を存分に味わう山菜料理である。

春一番の露の臺から始まって、独活、蕨、薇そして山菜の王者ともいわれるタラの芽などを茹でて和え

た山菜が賑わう時、ふるさとの良さを体感する。

葎や行者胡の菜茹もまた格別で、特有の臭みや味こそが「旬」と絶賛する美食家も多い。ホルモン料理の食事は、ゲバニラの類なき夕餉、加減無く（美津菜）であり、またしても 菜茹妻女の 伝え味（はる也）となるのである。

そういえば、独活の菜茹は重宝である。葉は天婦羅、茎は和えもの、根は生の刺身となり、「これぞ旬」と好まれる。だから、農繁期の最中に揚げ立ての独活の天婦羅、酔味嗜和え、刺身、そして漬け物が並んだ「ウド尽くし」の飯台を思い起こしては、山葡萄の傍に移植した独活に舌鼓を打つこのころ。

石鹼玉……しゃほん玉 とんだ屋根までとんだ 屋根までとんだ

こわれて消えた しゃほん玉 消えて 飛ばずに消えた うま

風 吹くな しゃほん玉 とばそ
（一九二〇年大正九）野口雨情詩、中山晋平曲の「しゃほん玉」は、小学生時代の遊びそのものであったと語り合う一泊旅行のクラス会。

鯉のぼり五月に合わせるように、貴重な石鹼液でシャボン玉遊びに興じた。針金で作った輪比べ、高さ比べ、飛距離比べ等々、風の無い日に仲間と腕比べをした。遠くで近い日々。割るるまで 目鼻歪みて しゃ

ほん玉（久美子）、シャボン玉 父と子の眉（一文字（知世子））となったり、石鹼玉 消ゆるを待たず 吹きにけり（寿山）で吹き比べをしたりしたガキ大将は今もなお健在である。

そういえば、しゃほん玉も「はかないものたよえ」となることがある。しゃほん玉のような涙・瞳・恋心などと、いわゆるムード歌謡のキーワードになつたりもする。

これが「シャボン玉人生」となるという意味深長な発言となつて、形から心への変容・転移・飛躍などの表現となるようである。地区盆踊り大会での子ども参加賞は「しゃほん玉」であったが、どんなドラマが現出したのかと考へたりもしている。

ともあれ、折々の記は思いつくままの雑記となつてはと思う一方、時事放談擬きの一助にもなればと思ふが……

（元）郷土史編集専門員
尾池隆男

人口/7,530人（前月比△24人）、男/3,594人（前月比△16人）、女/3,936人（前月比△8人）
世帯数/2,855戸（前月比△20戸）、出生/5人、死亡/7人、転入/66人、転出/88人 【3月31日現在】

※住民登録の手続き上、人口増減と出生・死亡・転入・転出の増減は一致しないことがあります。



本誌の印刷には、大豆インクを使用しています。また用紙には再生紙（100%）を使用しています。